



IBM Watson® を活用した革新的なアプリが集結
世界大会進出をかけた
「Watson Build Challenge DEMO Day」が開催!

IBM Watson® を活用した革新的なアプリが集結 世界大会進出をかけた 「Watson Build Challenge DEMO Day」が開催!



2017年秋、コグニティブ・ビジネス実現の核となるAIプラットフォームであるWatson。そしてクラウド環境で先進的かつ迅速なアプリケーションの開発・展開を支えるIBM Cloudを活用した新たなサービスやアプリケーションの創造にチャレンジする「IBM Watson Build Challenge」が開催された。今年の「IBM Watson Build Challenge」では世界中から各国の選考を勝ち抜いたチームが鎬を削る「グローバル部門」と、日本国内でのビジネスを想定したアプリケーションビジネスプランを競う「日本部門」の二つのコンテストが実施された。2017年10月5日に開催されたグローバル部門日本決勝大会「IBM Watson Build Challenge DEMO Day」では技術審査を勝ち抜いたIBMのビジネスパートナー10チームがニューヨークで開催される世界大会に出場する日本代表の座をかけて白熱したプレゼンテーションを展開した。

※ IBM Bluemix は、「IBM Cloud」にブランド名称が統一されました。

実体験を通じて開発手法やプロセスを学ぶ

コグニティブ・ソリューションの市場は爆発的に拡大し、ある調査によると4年後には全世界の収益が470億米ドルに到達すると予測されている。こうした市場の成長を背景としてIBMでは、実体験を通じてアジャイル、デザイン思考、APIといった開発手法、プロセスを学ぶための機会としてIBM Watson Build Challengeを開催している。昨年はIBMの社員が参加し、115カ国から8,300のアイデアが寄せられ、その中から事業化されたアプリケーションも誕生している。

今年は、IBMのビジネスパートナーを対象として開催し、「今こそ、アクションを起こすチャンス。IBMと一緒に、この急成長する市場でビジネスを始めましょう」と参加を呼びかけた。参加するパートナーにとっては、Watson APIを理解、活用して、革新的なコグニティブ・ソリューションを提供するための新しいスキルとプロセスを獲得することにつながる。また、自社のスキルとノウハウを活かしたソリューションやオファリングを実用化する機会となるうえ、優秀なアプリケーションについては、IBMがプロモーションを支援するため、ビジネスを拡大するチャンスにもなっている。

決勝大会に至るまでの過程においてもIBMは、パートナー企業がWatsonアプリケーションを作るためのさまざまな支援活動を実施してきた。デザイン思考の手法を活用して新しいビジネスプランを創出するために「Cognitive Workshop」を東京・大阪・名古屋・福岡の5地区で開催し、113社314人が参加した。また、Bluemixハンズオンは、全国で12回開催し、95社231人が参加。さらに、9月に開催された事業化ワークショップでは、106人のIBM社員とともに16社49人が参加してビジネスプランを事業化するためのプロセスや手法を学んでもらった。



IBMのビジネスパートナーを対象に開催された
IBM Watson Build Challenge

IBM Watson® を活用した革新的なアプリが集結 世界大会進出をかけた 「Watson Build Challenge DEMO Day」が開催!



技術審査を勝ち抜いた10チームが 決勝大会に進出

この日の決勝大会では、技術審査を勝ち抜いた10チームが、構築したプロトタイプをもとに、1社7分間のプレゼンテーションと3分間の質疑応答を行う。その中から1チームが最優秀賞に選ばれ、日本地区のチャンピオンとして11月にニューヨークで開催される世界大会に参加する権利が与えられる。また、IBMが開催しているグローバルカンファレンス「Think2018」に招待されるとともに、グローバルでのプロモーション、メディアでの紹介、日本でのプロモーションやメディアでの紹介も約束される。

参加10チームを審査するのは、今回のイベントの仕掛け人の一人でIBM Global Business

Partner事業の日本の責任者である日本IBM 執行役員パートナー事業・アライアンス事業統括本部長岡田和敏審査員長をはじめ、テクニカル審査を行う日本IBM 技術理事の二上哲也氏、日本IBMのエグゼクティブメンバー5人の審査員と、外部審査員としてソフトバンク(株)戦略事業統括部AI事業推進部長の重政信和氏、LINE(株)戦略企画担当ディレクターの砂金信一郎氏の2人のゲスト審査員だ。

各チームのプレゼンテーション終了後には、審査員から「このアプリケーションを開発したそもそものきっかけは?」「競合となる製品にはどんなものが?」「実際の判定能力はどの程度?」など、的確な質問が飛んだ。それによって、プレゼンテーションを見ていたオーディエンスにも、よりアプリの特性が伝わったようだ。

決勝大会に残ったチーム (以下の9チームほか計10チーム)

会社名	チーム名	アプリケーション名
株式会社オーイーシー	WAVE OEC	「Virtual Roleplayer」
JFE システムズ株式会社	全社ワーキング活動ハッカソンに挑戦チーム	「スマ先生」
日本情報通信株式会社	Team Pecopeco	「Quinee」
東京日産コンピュータシステム株式会社	TCS TCS	「Watson for car dealer」
コムチュア株式会社	働き方改善チーム	「働き方改善サービス」
コムチュア株式会社	WatsonComture	「PeReRe (Personal Recipe Recommender) 」
ティアックオンキョーソリューションズ株式会社	Foodcoach	「food coach (フードコーチ) 」
株式会社セイノー情報サービス	シェアリング・トラック	「シェアリング・トラック」
情報技術開発株式会社	いきものがかり	「Smart Zoo」

IBM Watson® を活用した革新的なアプリが集結 世界大会進出をかけて 「Watson Build Challenge DEMO Day」が開催!



AI を活用して、 生活をよりよくするために

優勝に輝いたのは、情報技術開発のアプリケーションでその名も「Smart Zoo」。動物園を訪れた際、スマホで動物を撮影すると、その動物と音声チャットでやり取りしたり、園内のイベントを告知したりするなど、これまでにない動物園体験ができるアプリケーションだ。来園した後も、動物から次回来園のお願いメッセージが届くなど、リピーターの増加にもつなげることができる。

AI が活用されはじめた初期段階で開発されるアプリケーションは、チャットボットのようなアプリが多かったが、Smart Zoo はそこから一歩先に進んだアプリ。「AI は皆さんの生活をよりよくするもの」という IBM の狙いを具現化したアプリだったことが評価のポイントとなった。

準優勝は、ティアックオンキョーソリューションズの「フードコーチ」と、セイノー情報サービスの「シェアリング・トラック」が選ばれた。いずれも業界の課題を解決するために、Watson の特性を最大限に活かしたアプリケーションである点が高く評価された。また、会

場の観客の投票によって決められるオーディエンス賞には日本情報通信「Quinee」が選ばれた。

審査員長を務めた岡田氏は、「今日、皆さんのプレゼンテーションを拝見して、AI は特別なものではなく、皆さんの生活をよくするために、日常的に使われるものになってきていると実感した」と総評し、今後もこうした取り組みを続けていきたいと抱負を語った。Watson Build に参加したビジネスパートナーにとっても、コグニティブ技術を習得するとともにどうビジネス化していくのかを考える、素晴らしい機会となったようだ。



審査員長を務めた
日本 IBM 執行役員パートナー事業・アライアンス事業統括本部長 岡田和敏氏



動物の被りものをしてプレゼンテーションに臨んだ情報技術開発の「Smart ZOO」が日本代表に選出された。

IBM Watson® を活用した革新的なアプリが集結 世界大会進出をかけて 「Watson Build Challenge DEMO Day」が開催!



優勝

Smart Zoo（情報技術開発）

優勝に輝いた「Smart Zoo」を開発した情報技術開発は5人のチーム。プレゼンターを勤めたソリューション本部ソリューションコンサルティング部の下村和雅氏は、「2016年、Watsonに取り組むことが全社方針として決定し、トレーニングを受けてノウハウを蓄積したスタッフが集まって開発したのが『Smart Zoo』です」と、今回の応募のきっかけを話す。

「開発段階で考えていたのはアプリ開発の部分だけで、開発したアプリをどうビジネス化するかはあまり考えていませんでした。幕張で開催されたワークショップに参加し、IBMのメンターの方からはその点を指摘され、どうビジネス化するのかについてコンサルティングを受けました。今回の優勝にもつながる、重要な指摘を

受けることができたと思っています」と、日本IBMのメンターのサポートも課題解決の大きな力となったと下村氏は言う。

優勝企業に選ばれ世界大会への進出が決まったことで、英語版アプリ、英語でのプレゼンテーションと短期間に進めなければならない作業が目白押しだ。

「グローバルな動物園はどんな状況なのか、調べるところから始めなければなりません。今日、日本での決勝戦に参加し、素晴らしいアイデアのチームばかりが出場していることを実感しました。その中から最優秀賞に選んでもらったのですから、世界大会でも優勝を目指したいと思います」と、下村氏は力強く話してくれた。



優勝に輝いた情報技術開発のチーム：いきものがかり

IBM Watson® を活用した革新的なアプリが集結 世界大会進出をかけて 「Watson Build Challenge DEMO Day」が開催!



準優勝

フードコーチ (ティアックオンキヨーソリューションズ)

ティアックオンキヨーソリューションズは 10 人チーム。女子レスリングの吉田沙保里選手が在籍して有名になった至学館大学と協力して開発したアプリケーション「フードコーチ」に Watson を組み込んだ。アスリートにとって食事は、体調管理、協議会での成績に大きく影響する重要な要素だ。しかし、専門的な指導ができる栄養士は日本全国で、わずか 218 人しかいない。その専門的なノウハウを Watson が活用すること

で、より多くのアスリートの栄養指導を可能にするのがこのアプリだ。

「IBM の方からは、様々な種類の API をどう活用するのかといったノウハウを教えていただきました。本来は『Discovery』を使ってみたかったのですが、まだ日本語化されていなかったため*断念したのですが、準優勝に選ばれてうれしく思います」(ティアックオンキヨーソリューションズソリューション営業部 坂野道郎氏)



準優勝のティアックオンキヨーソリューションズ

* Watson API の Discovery は、2017 年 11 月現在、一部日本語対応しています。
Watson API の日本語対応は以下 URL をご参照ください。
<https://www.ibm.com/watson/jp-ja/developercloud/services-catalog.html>

IBM Watson® を活用した革新的なアプリが集結 世界大会進出をかけて 「Watson Build Challenge DEMO Day」が開催!



準優勝

シェアリング・トラック (セイノー情報サービス)

セイノー情報サービスは10人チームで、IBM Cloud (旧 Bluemix) を担当する新規事業チームプラス新人スタッフを交えて開発を行った。ドライバー不足や1輸送あたりの積載率の低下が運輸業界の大きな課題となっているなか、Watson を活用することでドライバーと荷主をマッチングさせるのが、このアプリケーションだ。

「社内で人工知能を活用すべし!ということがトップダウンで決定され、今回のコンテストで Watson 活用の成果を残すことができました。IBM のメンターの方からは、トラックの積載量を画像でどう判定するのかについて意見をいただき、400 枚の写真を撮影してデータとして取り込んでいきました。自社の枠を超えたオープンなプラットフォームを目指しました」(セイノー情報サービス 知識ベース推進室 主任 石井哲治氏)



準優勝のセイノー情報サービス

IBM Watson® を活用した革新的なアプリが集結 世界大会進出をかけた 「Watson Build Challenge DEMO Day」が開催!



世界大会に参加して

「各国の代表チームと交流し、今後も意見を交換できるネットワークを作ることができた」

グローバル部門で見事優勝（最優秀賞）に輝いた情報技術開発株式会社チームは日本地区チャンピオンとして2017年11月2日米国ニューヨークで開催されたWatsonBuild グローバル・チャンピオン大会に出場。全世界の7地区のチャンピオンとワイルドカードチーム（各地区の準優勝チームから選出された1チーム）の合計8チームでの世界大会に臨んだ。世界チャンピオンにはヨーロッパ代表の Blueit Group の b.digital 社が選ばれた。情報技術開発チームは動物園でのユニークな顧客体験を実現したサービスが高い評価につながった。

世界大会の様子や活動を通じて、得たものを情報技術開発に聞いた。

「世界大会に向けてビジネスプランやプレゼン内容をブラッシュアップできて、我々のソリューションをより現実的なものにすることができました。審査員や各国代表の方々に我々のソリューションを評価していただいたことをうれしく思います。

アグレッシブなチームばかりで、皆さんの言動からとても刺激を受けました。各国の代表チームと交流し、今後も意見を交換できるネットワークを作ることができたことは、我々にとって大きな収穫となりました。

IBMの方には、国内、現地を問わず、プレゼンレビューを含む細かなところまでサポートしていただきました。我々だけでは対応できなかった部分をサポートしていただけたからこそ、世界に通じるプレゼンテーションが行えたのだと感じています。」（情報技術開発）

